

第3章 まとめ

今回の調査は主郭（曲輪7・8）における遺構整備に向けて、『史跡 穆佐城跡Ⅰ』として報告済みの既調査の補足として実施した。

穆佐城の中心的な建物と考えられる曲輪7の奥、西半に位置する大型掘立柱建物と土塁との間の空間においては、枯山水等の庭園の存在を想定して調査をおこなったが、そのような空間が存在していたことを積極的に示すものは検出されなかった（25-7A）。土坑2基について自然科学分析をおこない、枯山水の池の可能性を想定していた大型の1基（土坑2）については、大量の稲藁が含まれていたことがわかり、何らかの実用的な用途を持った土坑であったと考えられる。またトイレ遺構と想定していた土坑（土坑28）については、残念ながら寄生虫卵等の検出には至らなかったが、これは乾湿を繰り返すシラス土壌の性質に負うところが大きい。今後の調査においても、環境条件等を検討し、自然科学分析は積極的に実施していく必要がある。

曲輪7西端の土塁上においては、柵列等の構築物の有無確認のため2ヶ所の調査区を設定したが、結果として構築物は検出されなかった（25-7B・C）。空堀に面した土塁の際は崩れていることも想定されることから、当初存在した柵列等の痕跡が今に残っていない可能性も考えられるが、基本的には土塁上に柵等は構築されていなかったと考えてよいと思われる。

現況3mの比高差を持つ曲輪7と8の間の斜面について、3ヶ所の調査区を設定した（25-7D・E・F）。うち西端の調査区については、曲輪7での前調査において曲輪8へと通じる通路かと想定される溝（溝1）が検出されたため、その確認をおこなったが、この溝は曲輪7際で収束し、斜面・曲輪8へと通じてはいなかった。今回調査において他の斜面中に設けた調査区でも通路は確認されなかったため、現状では曲輪7と8の連絡は、前調査で検出された斜面中ほどの階段状の遺構と、曲輪7東際を南北に縦断する堀底道との2ヶ所に限定されていたと解釈できる。

3ヶ所の調査区それぞれでの斜面の様相はいずれも地山のシラスを削り出しているが、その傾斜角はそれぞれ40度、50度、60度と一定ではない。シラス土壌の特性を生かした南九州の大型山城では、特に空堀では垂直に近い傾斜を持つものが多いが、堀を介さない曲輪間の段差では、空堀ほどの防御性を意識せず緩やかな傾斜とした場合もあるのであろう。

主郭である曲輪7南東端の出入口部（虎口）については、前調査において可能性を指摘していたことであるが、鍵の手に折れ曲がるL字形の構造ではなく、突き当たりから左右双方に通路が伸びるT字形の構造を持つことが確定した（26-7A）。うち、北方に伸びる通路は堀底道として曲輪7から同じく主郭と評価される曲輪8へと抜けることはこれまでの調査で確認できているが（通路①）、南方に伸びる通路がそのまま曲輪7の南に隣接する曲輪9へと通じるのか、曲輪9の位置付けもあわせて今後明らかにしていかなければならない。またT字形の出入口については、県内では中世伊東本宗家の本拠である西都市都於郡城の奥ノ城に見られるが、他に鹿児島県南九州市知覧城、同鹿児島市苦辛城、同串木野市串木野城などにもあり（南九州城郭談話会諸氏教示）、南九州に広く分布するようである。その初現や構築主体等、今後の南九州における城郭研究の中で重視しなければいけない問題であらう。

この北方に伸びる堀底道（東端堀・通路①）については、4ヶ所の調査区で東側の肩口を検出し（26-7B・C・E・F）、前調査の成果とあわせてその規模は上端幅 3.5 m（26-7Cでは 4.3 m）、底面幅 1.8 m、深 2.6 mを測る。

この堀底道が曲輪 8 と連絡する地点である曲輪 7 の北東端においては一部堀の底面まで掘り下げをおこなった（26-7D）。検出面から底面までの深は 2.5 m で、東側の立ち上がりの角度は垂直に近い。また底面は地山であるシラス土をそのまま使用面とするのではなく、細かく丁寧な造成によって通路面を構築していることが確認できた。土層の検討では複数回水が流れたような痕跡も確認できたことから、必然的に曲輪面からの雨水等が流れ込むことになる堀底道について、水に弱いシラス土そのままでは使用に耐えなかったためと考えられる。

この地点における土層の堆積は、その様相から大きく 4 つの時期に分かれ、上から近世以降の耕作等にもなう土、廃城時の埋め土、出入口とこれに連絡する通路の作り替えにもなう造成土、当初構築時の底面形成のための造成土と解釈できる。うち最も下位の造成土中から出土した陶磁類の年代観を積極的に評価すると、この堀底道（およびこれが連絡する曲輪 7 南東端の T 字形出入口部）が構築された時期は 16 世紀初頭から 16 世紀中頃に比定される可能性が高い。史料に見る穆佐城の歴史では、この間、1540 年に穆佐城主長倉上総介が弟である長嶺地頭長倉能登守とともに伊東義祐に対して反乱を起こし鎮圧されるという事件が起きている（長倉能登守の乱）。この反乱は飢肥の島津豊州家の援軍も得ての大規模なものであったため、上総介がその居城である穆佐城において戦闘に向けての大規模な改修をしていたとしても不思議はない。主郭内における深さ 2.5 m の大規模な出入口とこれにもなう堀底道という過度に防御を意識した導線は、あるいはこの長倉上総介の時代に構築されたものとも考えられる。

穆佐城跡では平成 15 年度から整備にもなう調査を開始し、今日現在も継続して実施している。現状では南九州の城郭の中で、最も長期間、継続的に発掘調査を実施している城跡となっており、南九州のみならず、全国的な視点での城郭の調査・研究においても果たすべき責は大きくなりつつある。これは整備の観点から見ても同様であり、これまでの調査成果を踏まえ、今後主郭（曲輪 7・8）での遺構整備について慎重に検討をおこなっていききたい。